

2008年12月より 刑事事件の控訴審が開始

被告7名の刑事事件控訴審は、2008年12月15日の第1回公判より東京高等裁判所で審理が始まります。

1. 被告側は吉田氏が国家意思に基づき組織破壊を行つたと主張

「浦和電車区事件」の判事裁判は、第一審で4年5ヶ月もの長期間にわたって審理が重ねられ、事実関係はもはや明らかになっています。被告側が新たな主張をしようとも、控訴審で改めて審理すべき内容は限定され、比較的早期に裁判が終結するとの見方もあります。ところで、被告側弁護団が2008年6月26日に提出した「控訴趣意補充書」における主張のポイントは以下の通りです。

- ①被告人らの諸行動は、組合の団結を守るための行為そのものであり、正当な労働組合活動である。これを犯罪とするならば、労

働組合の活動などまったくできなくなる。労働組合に死を宣告しているともいえるこのような認定は到底認められない。

②本件の国策捜査は、JR東労組を破壊することを目的とする国家意思によつて行われた。東労組を破壊する裏の主人公が警視庁公安部公安二課であり、表の主人公は吉田である。この背景事情を無視したうえで吉田証言の信用性を判断した結果は、まったくの誤りである。

③吉田は同僚や他の分会組合員らに対して嘘をつき、対立する労組幹部の指示に従い、真摯に謝罪することなく、被告人ら分会組合員を振り回したあげく、自ら脱退、退職した。現在はJR東労組と対立するJR連合の支援で復職の民事裁判を起こしている。JR連合は、東労組を破壊する目的でつくられた労働組合であり、



破壊攻撃の一つのパターンである。

④吉田が東労組を脱退し、JR東日本を退職したのは、浦和電車区分会や被告人らの行為に恐怖したからではない。分会の組合員と職場で関係を持たざるを得ないことが苦痛であり嫌だったことから、自ら組合を脱退し、会社を退職した。

果たして、一人の普通の若手社員が、国家意思に基づき、職を失う危険を冒してまで、人生を賭けてJR東労組を破壊しようとするでしょうか。事件の真実は、吉田氏が、組合活動に熱心でないこと、JR連合の組合員とキャンプを行ったことを理由に、「組織破壊者」として集団で徹底して糾弾、恫喝され、脱退、退職に追い込まれたということです。このような些細な理由で吊し上げを行う異常な組織だからこそ、吉田氏は糾弾を避けようと、嘘の弁明をしなければならなくなつたのであり、吉田氏を加害者だとする主張などは、非常識も甚だしいと言わざるを得ません。

2. 被告らの行為はきわめて悪質！ 決して「えん罪」ではない

刑事裁判の控訴審にむけ、JR東労組は大弁護団を結成し「国家意思による弾圧」「吉田は東労組破壊の表の主人公」などと荒唐無稽な主張をしています。しかし、事件の真実は明らかです。被告らが吉田氏に行つた行為は、正当な労働組合活動ではなく、人間の尊厳を否定し人生を破壊する、きわめて悪質な犯罪であり、決して「えん罪」ではないのです。

JR総連・JR東労組の一般組合員は、加害者の支援のために多額の組合費が使われ、控訴審でも大量動員されて振り回されることに納

得できるのでしょうか。

「ろくな力になつてくれていない」と連合批判

JR総連・JR東労組は、「えん罪JR浦和電車区事件を支援する会」をつくり、国会議員、地方議員、連合・交運労協や構成労組、海外労組など、部外組織などに支援を要請しています。

しかし、JR総連前副委員長の四茂野修氏が、「われらのインター(vol.2)」(2007年9月発行)では、被告らとの座談会の中で、以下のように泣き言を述べて連合批判をしており、支援の輪が広がらないことに業を煮やしているようです。

連合とか交運労協はグズグズして、JR連合がうるさいことを言うのでやれないとかなんとか言っているけれども、これは黙つてそうですかというつもりはもうないです。事実ははつきりして



被告7名の懲戒解雇から1年が経過し、JR東労組の全職場で集会を開催したというが、JR労組の分裂で組織再建中の新潟・長野地方本部などには方針を徹底できずにいるようだ

いると、資料を持つていくから話を聞いてくれと、向こうを呼んでもいいから決着しようよと、この問題をどう見るかはつきりしているのです。例えば、連合の中で調査委員会を作ってくれと、この問題について連合にも判るように資料を出すから、その上で対応をしてくれよと連合に迫つていこうと。駄目だったら駄目でそれはしょうがないのだから。どうせ今までろくな力になつてくれていないんだから。

3. 紛争行為を正当化する組合が会社のパートナーであつてはならない

労働組合の本分は、弱者を助け、働く者の連帯を築き、地位の向上を図り、幸せを築くことです。組織に都合の悪い者であれば、平気で人間の尊厳や人格を否定するJR東労組の卑劣なやり方は、およそ労働組合の運動とはいえません。また、JR労働者は安全の確保が最優先課題であり、運転士の仲間でありながら、吉田氏に糾弾や吊し上げを繰り返し、疲労の極限に追い込んで運転をさせることなど言語道断です。三鷹電車区事件では、JR東労組役員らは、佐藤氏に対して、点呼妨害、対向列車からのパッシング、入換信号機を隠す、という安全破壊行為も行いました。安全確保を使命とする鉄道労働者として、絶対に許されない行為です。

JR東労組と被告らは猛省し吉田氏や佐藤氏に謝罪すべき

JR東労組は被告7名を「美世志会」と英雄視し、解雇撤回や控訴審勝利を内外に訴えていますが、彼らの支援を求める前にすべきこと

があるはずです。それは、吉田氏や、三鷹電車区事件被害者の佐藤氏に心から謝罪し、被害者の救済を支援すること、そして、卑劣な行為を猛省し、安全で安心できる職場づくりに取り組むことです。

吉田氏の復職にむけた民事裁判も着々と進んでいますが、復職が実現しても、吉田氏が安心して働ける職場を確保できるかが課題となります。JR東日本において、社員がお互いを信頼し合い、安心して安全に働ける職場を築くという、あたりまえのことが求められているのです。

しかし、反省の姿勢がまったくないJR東労組執行部に、良識を期待することは難しいと言わざるを得ません。組合員が被告支援の運動を黙認し継続する限り、事態は変わりません。今こそ「おかしいことはおかしい」と声を上げ、職場からの改革を進めていかなければならぬと考えます。「積極攻撃型組織防衛論」を誇り、糾弾行為を正当化し、微塵の反省もない組合は労働組合とは言えません。そのような組織が、JR東日本の経営のパートナーであつてよいはずはないのです。

控訴審勝利！早期職場復帰を勝ちとろう！

遺憾・違法の一審判決をくつがえそう！

JR東日本電車区事件は「御要望」で一審有罪判決がなされました。しかし、原告のようも「御要望」に由るような遺憾な一審判決の一因である辯当台ひが犯罪ござります。

一審判決では「面接相手」という言葉はほとんど出てきません。弁護士と労働者が採用された組合活動に対する認識も欠如しています。裁判所は「は死裡の行儀」として採用された組合を原告にして、JR東日本に原告と7名が行った石井の「どうぞ」のうじに「強制した」と、この点を強調しています。強制ではなく、強制されただけであります。一審判決に遺憾・違法性をくつがえしていくなければなりません。

強要罪（けういざい）
①主犯・教唆・自己
名義もしくは付名にか
ねて元ふるを犯させ
して強制し、又は暴
行を加へて、人に威迫
もきこじを行つかず、又
は暴力で行動をけしめし
た者は、二年以下の懲
役に処する。

美世志会に、もう一度ハンドルを！

組合活動の否定・介入は許さない

一審判決を受け、JR東日本は8月31日、吉田氏に賃料滞留処分を発令しました。「指定候補の立候補」をも根拠に解雇処分に強い順位を算出せん。ただちに吉田氏は「立候補の立候補」を立て、許年12ヶ月、東京地裁が吉世志会の主導権をほぼ全般的に認めた命令を出します。2018年1月、この命令を不服としJR東日本は「異議申立て」を行いました。異議申立てです。

「強制組合を求める署名」は吉世志会が強制されただけであります。組合員に誤解にとどつき、改端からうらみが生じた結果、組合活動への不当な介入を許さない取り組みをさらに強化していきましょう。

当面の行動・・・みんなで参加・成功させよう！

□控訴審裁判までピラ配布行動を継続し、貢献を広めよう

□7・17不當判決から1年

△不當判決撲滅！控訴審勝利！ 全国統一行動

□不当判決から1年 不当選戒除運動大集会

△求める取り組み（3月）

□△不當判決から6年 控訴審勝利大集会（11月）

「美世志会」（被告7名）に「もう一度ハンドルを！」などと訴えるJR東労組の資料。ハンドルを握るべきは、被害者の吉田氏である